

城郭探訪

まちづくりと城の址

日南市 飢肥城

飢肥城下町の歴史遺産を生かした まちづくり

日南市長(宮崎県) 高橋 透



飢肥城周辺の地形と歴史的環境

日南市飢肥は飢肥藩伊東家五万一千石の城下町である。周辺には島津氏と伊東氏の抗争の舞台となった城・砦・陣跡が多く残されている。飢肥城はそのうちのひとつで、蛇行する酒谷川に囲まれた台地の先端部に築

かれた平山城である。台地を含む周辺二帯は、鹿児島湾の最奥部にあった始良火山から約3万年前に噴出した入戸火砕流を起源とするシラスによって形成されている。飢肥城は、城下北側の一段高いシラス台地を空堀で縦横に区画し、西側は酒谷川、北側は急峻なシラス台地の崖となる規模壮大な縄

張りを持つ。各曲輪は一辺が50〜100mほどあり、本丸がどれか明確でないことが特徴である。「飢肥」の地名は平安時代中頃の「倭名類聚抄」に見え、古くから政治・経済の中心の役割を担っていたと考えられる。やがて島津豊州家が入城して日明貿易の中継港である油津や外浦を支配し、その後、宮崎平野に力を持つ伊東義祐との間で約25年に及ぶ攻城戦が展開された。豊臣秀吉の天下統一後、伊東祐兵が入城し飢肥藩の城下町として栄え、廃藩置県により廃城となった。

伝統的建造物群保存地区と 飢肥城復元事業

日南市では高度経済成長期以降過疎化が進みつつある中、昭和49年に飢肥城復元事業が始まった。財源確保のため募金活動を推進し、市議会において「文化財保存都市宣言」を行い、歴史的町並みを生かした町おこし戦略を打ち出した。その結果、総事業費



飢肥城大手門



横馬場

飢肥城



本町通り (拡幅前)



本町通り (拡幅後)

5億1800万円のうち、2億2000万円が市民や市出身者、有志企業からの募金で賄われた。国では昭和50年に文化財保護法の改正が行われ、伝統的な町並みに対して重要伝統的建造物群保存地区の選定ができるとされ、昭和52年、飫肥は九州で最初の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

本町通り拡幅事業以降のまちづくりの取り組みと課題

飫肥の町並み保存のきっかけは、飫肥城復元事業と伝統的建造物群保存地区の決定であったが、もう一つ本町商店街の道路拡幅工事があった。拡幅工事により失われていくものの価値に気づいた人々は、今後新

歴史探訪コラム

城と都市の
でんせつ

江口知秀
建設産業図書館 学芸員

野中金右衛門と門松

天正16年に伊東祐兵が飫肥に封ぜられて以来、幕末に至る長い歴史の中で、2人の偉人が輩出された。1人は日露講和条約を結んだ外相・小村寿太郎であり、もう1人は野中金右衛門という、後期飫肥藩の財政を支えた人物だった。

飫肥藩の主要専売品として藩を支えたのは飫肥杉だった。吸水性が低く、軽量で強度が高いため、木造船建材などに用いられた。文献には「元治元年から一年間の藩の山方物産の収益で、木材が全体の約7割を占めていた」とあり、飫肥杉をはじめとする木材に財政を依存していたことがわかる。明治25年に農商務省が編纂した『大日本農功伝』によれば、野中金右衛門は寛政8年に初めて植木方を命ぜられ、以来50年も

築する建物を飫肥の町にふさわしいものに造り上げようと模索し始め、その結果、地区住民の自発的な申し合わせにより城下町にふさわしい商店街が出来上がった。

この伊東氏五万一千石の城下町飫肥で毎年10月の週末2日間にわたって行われる「飫肥城下まつり」は、日南の秋の風物詩となっている。飫肥城跡を中心とした会場では、早馬や宮崎県指定無形民俗文化財「泰平踊」の披露などさまざまなイベントが行われ、多くの観光客でにぎわう。

また、飫肥では伝統的な建築様式を生かしつつ、新たなにぎわいを生み出すような取り組みを行っている。近年では、歴史的建造物に芸術家が期間限定で作品展示を行うDENKEN WEEKの開催や、民間による市指定文化財の宿泊施設利用など新たなまちづくりの可能性に挑戦している。住民の高齢化や世代交代に伴う空き家の増加など残された課題は多いが、これまでの成功や失敗の経験を今後のまちづくりに生かしていきたいと考えている。

の長きにわたり、山野に起居して幾百万の飫肥杉を植え、育てたという。そういった人物にふさわしい逸話をご紹介します。

天保年間の藩政改革時に、野中は門松について建白した。「正月の門松は古来の儀礼として重要だが松の木を切つて用いる必要はない。わが藩では毎年家々に四本の門松をたてるが、一万の家があるとすれば四万の松を切ることになる。それだけあればどれだけ藩の役に立てられようか」。以来、飫肥では松を切ることなく、枝葉をもってこれに代えたという。

『大日本農功伝』より後の昭和3年に著された『日向経済史雑考』では、門松は「建物一棟一棟の出入口、倉庫、竈、釜屋、井戸、便所、納屋、庭屋等に悉く」などと数を盛っており、おそらくこの逸話は「伝説」の域を出ないものだろう。